

# 人生百年時代、伊能忠敬に学ぶ 「天命成就の生き方」

## ●「心の青春寿命」は 延びているのか？

老人福祉法が制定された昭和38年、百歳以上の方は153人、百歳と

いうと「凄い！」と言われたものですが、平成10年には1万人超え、平成24年には5万人超え、今現在は7万人に迫っています。サミュエル・ウルマンの「青春の詩」の一節に、「青春とは人生の一時期のことではなく心のあり方のことだ。若くある

ためには、創造力・強い意志・情熱・勇気が必要であり、安易（やすき）に就こうとする心を叱咤する冒険への希求がなければならぬ。

人間は年齢（とし）を重ねた時老いるのではない。理想をなくした時老いるのである」とあります。長寿自体は喜ばしいことですが、日本人の「心の青春寿命」は果たして延びているのでしょうか？

## ●「士魂商才」の 商い人生

今よりも平均寿命が短か

った江戸時代ですが、伊能忠敬（いのただたか）の生き様には、人生百年時代における「心の青春寿命延伸」のヒントが満ちています。伊能忠敬の一番の業績は、測量によって正確な日本地図（正式名：大日本沿海輿地全図）を完成させたことですが、測量人生に至るまでの前半生を見てみましょう。忠敬は延享2年（1745年）、上総国山辺郡（現・千葉県山武郡九十九里町小関）の名主・小関五郎左衛門家で生まれます。17歳で下総国香取郡（現・千葉県香取市佐原）の酒造家の伊能家に婿養子に入り、商才を發揮し、伊能家を再興。36歳で名主となります。

リーダーの力量は、危機の中でこそ発揮されます。天明5年（1785年）浅間山の噴火以降、天命の大飢饉で毎年不作が続きます。忠敬は米の値上がりを見越して、関西方面から大量の米を仕入れますが、米相場が翌年の春から夏にかけて下がり続け、多額の差額損を抱え始めます。周囲からは、早く売り払ってこれ以上

の損を防げとの声が出ますが、忠敬は、あえて米を全く売らない決断をします。忠敬は、もしこのまま米価が下がり続けて大損を出したら、10年間かけて借金を返そうという覚悟です。

そしてその年の7月、利根川の大洪水によって佐原村の農業は大損害を受け、農民は日々の暮らしにも困るようになります。損得だけで言えば、高値で売り出し、大儲けするチャンスです。しかし忠敬は、身銭を切って米や金銭を分け与えるなど、貧民救済に取り組みます。

他の村から逃げ込んできた者たちにも、一人につき一日一文を与えたり、質屋にも金を融通し、村人が質入れしやすくなるようにします。翌年にも同様の取り組みを続け、佐原村からは奇跡的に一人の餓死者も出なかつたそうです。

また天明7年（1787年）、江戸で裕福な商家を襲う打ちこわしが起これ、この騒動が佐原に及ぶことを恐れた商人たちが、お金を出し合い、



伊能忠敬像



伊能忠敬旧宅 (千葉県香取市)

## ●測量人としての 「天命成就の旅」

当時50歳といえは高齢者ですが、心が青春の忠敬は、江戸に出て趣味だった暦学・天文学の勉強を始めます。天文学の第一人者・高橋至時(よしとき)の元で5年ほど修行し、天体観測に自信も持ち始めたころ、「誰もきちんと観測していない天体を研究したい。そうだ、地球を調べよう!」

と思い立ちます。地球についても現実的には日本の測量ですが、時代は江戸、事は簡単ではありません。各地の大名の領地を通ることに予算確保の上からも、幕府の許可を取らないといけません。正確な地図の概念も必要性も感じない幕府は、当初否定的でした。しかしここで、天の時と地の利が働きます。帝政ロシアが蝦夷(今の北海道)に圧力を掛けてきました。至時は、蝦夷防御のためには正確な地図の作成が必要で、その任には忠敬が最適と推薦しますが、忠敬には知名度や信用がありません。が、時を同じくして、佐原の住民たちが、忠敬の徳行を称え、苗字帯刀を許可し

て欲しいと幕府に願い出ます。苗字帯刀を許された忠敬は、同時に幕府からの信用も獲得します。そして、寛政12年(1800年)、55歳の忠敬は、幕府の命により江戸から蝦夷に向けて出発します。商人時代の徳行が、引退後の事業の追い風となるといのは、現代でも同様です。以降、文化13年(1816年)まで、17年間かけて日本全土を測量します。55歳から始めて72歳まで、実に35000キロメートル、4000万歩の旅でした。地球一周40000キロメートルと比べても、その偉大さは一目瞭然です。何故なら、自然条件がはるかに厳しい江戸時代ですから、生命の危機が何度もあったのです。測量を終えた翌年の73歳で病に倒れ、日本全図(通称・伊能図)の完成は弟子の手に委ねられます。

作家・井上ひさし氏は、昭和52年(1977年)、忠敬を主人公にした小説「四千万歩の男」を発表しました。隠居後に新たな挑戦を始める「一身にして二生を得る」生き方は、平均寿命が伸び、定年後の人生が長い現代社会のお手本です。成功した企業家が、第二の人生でどういう「社会志産」を遺していくのか?それが問われる時代です。

役人に守ってもらおうと考えたとき、忠敬だけは「役人は当てにならない、どうせなら農民に与え、農民に守ってもらおう」と主張します。結果、役人の力を借りずに、佐原は打ちこわしの危機を逃れます。



佐原が全ての危機を脱したところで、忠敬は持っていた残りの米を江戸で売り払い、これによって多額の利益を得ます。忠敬は50歳で引退、息子に家督を引き継ぎます。築いた財産は3万両、今なら30億円相当といわれています。まさに「土魂商才」

「論語と算盤」の見本です。

敬の徳行を称え、苗字帯刀を許可し

られる時代です。

## profile

**臥龍** (がりゅう: wolong ウォロン) こと  
**角田識之** (すみだのりゆき Sumida Noriyuki)

APRA (エープラ) 議長 &

一般社団法人「志授業」推進協議会・理事長

「坂の上の雲」の故郷、愛媛県・松山市生まれ。23歳のときに「竜馬がゆく」を読み、「世界の海援隊」を創ることを志す。人の幸福を主軸とする「人本主義思想」の素晴らしさを経営の場で実証推進する和僑(日本)と華僑(台湾・上海)合同の勉強会「APRA (エープラ)」を設立し、日本全国そしてアジア太平洋各国を東奔西走中。最近では、一般社団法人「志授業」推進協議会の理事長として、小中学生の大志確立を支援する「志授業」の普及、民族肯定観を上げるための「歴史・偉人」の講話にも注力中。詳細は「志授業」でご検索ください。